僕のヒーローアカデミアー光り輝く自慢の拳ー

助ハム

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

総人口の約８割が何らかの超常能力、〝個性〟を持ち、その〝個性〟によって社会を守る〝ヒーロー〟という存在が確立された世界。

だが、極稀に、突然変異を起こし、血筋とはまるで違った個性を持ち生まれる者もいる。

この物語は、そんな極稀な例外を抱えながらも、皆を守れるヒーローを目指すと志したある青年の物語。

目　次

設定資料集 ―― 1
第０話　オリジン～前編～ ―― 4
第０話　オリジン～中編～ ―― 11
第０話　オリジン～後編～ ―― 16
第１話　始まり ―― 25
第２話　試験 ―― 33
第３話　入学 ―― 40

設定資料集

拳輝（けんき）　和真（かずま）

年齢：15歳

住んでる場所：　東京都の雄英近くにあるアパート

この物語の主人公。大人しく、落ち着いた性格だが、どこか熱い性格で、頭もそれなりに良く、運動神経もなかなか良い。（ただし鈍感）昔から曲った事が嫌いで自分を貫こうと頑張る受験生。5歳の時に両親を亡くし、葬式の際、両親の知り合いに当たる君島（きみしま）　君島（くにひこ）　邦彦に養子として引き取られ、小学3年まで育てられたが、＊オール・フォー・ワンとオールマイトとの一回目の激戦で起きた被害で君島を失う。その後、小学3年後半から、心を閉じ、やさぐれ、自暴自棄になり、ほぼ不登校になっていた。しかし、そんなとこを頂速（ちょうそく）　空我（くうが）に救われ、立ち直り、雄英受験前日まで頑張って勉強し、個性もある程度は使いこなせるようにした。成績を入試可能なとこまで上げ、皆を守るヒーローを目指すために雄英の試験に挑む。（ちなみにとあるヒーローからたびたび援助金をもらっている）

個性：シェルブリット（名前は空我命名）

周りの物質を分解・粒子化させ、右腕を赤と金を基調とした腕に纏わせるように再構築し、背中には3枚の赤い羽根が付く個性（わからなかった方はシェルブリット第1形態で調べてください）なお、髪が逆立ち、人格が変わるという変わった面もある。ちなみに、使用すると一度、右腕が手の甲から肩と上腕の間の付け根まで三枚おろしの状態となり、そこから金の糸が分かれた腕を合わせるように巻き付き、再構築すると言った流れになる為、周りからすれば痛そうに見える。（本人は気にして無いらしい）　さらに、奥の手として全身に左腕が右腕と同じ状態の黄金の鎧を身に纏うことが可能…だが今は長くて5分が限界な為、滅多に使わない。（ちなみに解除後は粒子化した物質は元に戻る）

絶影（たちかげ）　劉影（りゅうえい）

年齢：15

住んでる場所：豪邸

この物語のもう1人の主人公。執事と暮らしている。常に冷静沈着で情に左右されず、しかし熱い所もあるなど、和真と似たような性格を持っている……が何故か本人は否定している。（鈍感に加え、不器用）そんな彼の親は、サポートアイテムなどの面で日本のプロヒーロー達を支えている企業、桐生コーポレーションと結託している絶影（たちかげ）グループの社長（夫）とその秘書（妻）であったのだが、休日の旅行中に突如現れた個性使いにより１０歳という若さで両親を亡くす。その後、桐生家に引き取られ、親を亡くした復讐心を糧にヒーローを目指す。身体能力や頭脳はカズマより少し上。

個性：絶影（ぜつえい）（劉影命名）

周りの物質を分解・粒子化・再構築する所は和真と似ている（解除後も）が、劉影の場合、白と青が基調の人型で、赤い瞳を持つ顔が半分隠れ、腕が拘束されている何かを生成する点、和真とは異なっている。さらにこの個性、何か力を隠している…らしい。

ヒーロー名：クーガー

年齢：２１

住んでる場所：事務所近くの一軒家（本人は不本意）

世界で一番速さが好きと言っても過言ではないほど速さと平和を愛する男であり、世界Ｎｏ．４のプロヒーローであのＮｏ．３ヒーロー、ホークスと同じ速さを持つヒーロー。言うことも勿論早口。ドライブも速さ重視（敵（ヴィラン）を追う時又は非常事態でのみ）。そんな彼だが、性格面に関しては情が熱く、一途である。ちなみに彼は名前も速さを優先するため、よく間違える……が、大切に思っている人はわざと…らしい…。

個性ラディカル・グッド・スピード（空我命名）

こちらもまた、劉影と和真と同じ、物質を分解、粒子化、再構築だが、空我の場合、脚、又は車に装着する。名前にスピードがついてる通り、速さを重視した個性で、とにかく速い。目で追えるか疑問に思うほど速い。と言うか速過ぎる。など。加えて、跳躍力は本気を出せ

ば、なんと高層ビル7階以上だとか。……マジでなんなんでしょうか

…この人……いや、人というか…もはや……うん（）

ちなみにこの人も解除後は粒子化した物質は元に戻る

第０話　オリジン～前編～

ザーーー

…雨が……降っている……。

……周りから…悲鳴が聞こえる……

……何が起きたんだ……。

???

「……い!!?……ぶか～!!?」

…だ…れだ…？

???

「おーい!!?だ……ぶか～!!?」

???

「おーい!!?大丈夫か～!!?」

……誰でもいい……誰か……

???

「誰か…助け…て」

ジリリリリリリリリ!!?

???

「……るさいな。」

カチンっ！

???

「……またあの夢か。」

青年は目覚める。見慣れた天井を見ながら。

???

「……まだ慣れないなぁ…一人は……。」

そう…あの日…あの日から全てはじまった……。

世界総人口の八割が何らかの特異体質である超人社会となった現在。　生まれ持った超常的な力〝個性〟を悪用する犯罪者・敵(ヴィラン)が増加の一途をたどる中、同じく〝個性〟を持つ者たちが〝ヒーロー〟として敵(ヴィラン)や災害に立ち向かい、人々を救ける社会が確立されていた。

この物語は、この青年拳輝（けんき）　和真（かずま）がヒーローの卵になる前の物語であり、ヒーローになる決意を決めたきっかけになる物語。

１０年前、俺は……両親を亡くした。何でも交通事故が原因らしい。その後、両親の葬式で、親戚の人たちが集まって、誰が俺を引き取るかの相談をしていた。そこで現れたのが、俺の父の親友（と名乗っている男）、君島（きみしま）　邦彦（くにひこ）と言う男だ。他の親戚とは揉めたが、「父の遺言だ」と言って押し切ってくれたが、そんなこんなで色々とあって、君島は俺を引き取ってくれた。彼は、俺を引き取ってから、俺を自分の息子のように育ててくれた。……恩を作るためとかそう言うことではなく、ただただ、思いやりの気持ちだった。

…毎日が充実してて、幸せだった。

ーーーーーあの日までは、

～5年前～

和真

『ただいま…』

パンッ‼？

和真

「うおっ⁉？」

君島

「かっずまくーん‼？おっかえりー‼？」

和真

「君島さん…クラッカー持って何してるんすか…。」

君島

「決まってんでしょ？今日は和真くんの誕生日でしょ？」

和真

「…あっ…。」

君島

「…もしかして…忘れてた？」
和真
「…すっかり。」
君島
「……まぁ…その…なんだ…よし！ドライブに行くか‼？」
自慢の新車のキーを見せ
和真
「…なんか…すいません。」

和真
「ところで、君島さん。どこに行くんですか？」
君島
「そうだな……前から欲しいっつってたあの新作ゲーム、買ってやるよ！」
和真
「……まさか…あのモ○ハ○４⁉？」
君島
「おうよ‼？」
ーーーーー暫くしてーーーーー
和真
「君島さん！ありがとう‼？」
君島
「あ…あぁ…。（しまった……プレゼント以外、色々買い過ぎた…（汗）
……まぁ……いいか。）」
俺の誕生日プレゼントを買った後……帰宅のドライブをしていた最中、
……それが…全ての始まりだった。
ドゴオオオオオオオオオオオン‼？‼？
ーーーーー轟音が響く。
和真
「⁉？なんの音⁉？」

君島
「和真……伏せろ。」
和真
「え？なん…」
君島
「いいから伏せろ‼？」
和真
「っ⁉？」
フッ……。

ーーーーーー刹那、視界が黒く染まる

次に目を開けた時に見たもの。それはーーーーーーーーーー地獄だった。
周りは火の海で…只、ひたすら助けを求める声が聞こえる
和真
「……誰か…助け…」
君島
「和真ー‼？」
和真
「き…君島…さん……」
君島
「大丈夫か⁉？和真‼？」
和真
「…大丈夫……だ…‼？」
少し重い体を起こし、立ち上がる。
和真
「…一体何が……？」
君島

「わからない…。ただ……っ⁉?」
和真
「…おい…どうしたんだよ……君島さっ……⁉?」
???
「やぁ、久しぶりだねぇ。和真君。」
そこには……ここに居てはいけない…邪悪の塊…いや、邪悪そのものがそこに存在していた。
…その名前は……
君島
「…ＡＦＯ(オール・フォー・ワン)…⁉?
和真
「知ってんのか君島⁉?てか…なんで俺の名前を……⁉?」
君島
「……和真、逃げろ。」
和真
「…はぁ⁉?なんで…」
君島
「さっさと行け⁉?」
和真
「…君島さん……。」
ＡＦＯ
「おいおい……逃げろってそりゃないってもんだろ?ねぇ……」
瞬間、夥(おびただ)しい量の殺気が放たれる。
ＡＦＯ
「……邪魔だよ。君。」
瞬間、目の前が血に染まった。
君島
「…かはっ……」
和真
「……き……君島さん……⁉?」
君島の体からは大量に血が出ている

和真
「君島さん！君島さん‼？」
君島
「馬鹿…野郎……。早く…逃げろ…よ……。」
和真
「何言ってるんですか……君島さん……！」
君島
「いいから…逃げろっ‼？」
男は、声を振り絞る。
和真
「……っ…‼？」
青年は走り出す。男と男の…最後の約束を交わし、守られた命で…生きる為。
ＡＦＯ
「……まだ立ちはだかる気かい？」
君島
「当たり……前だろ……！」
ＡＦＯ
「…個性を持ってるならまだしも、無個性な君に何ができるんだい？」
君島
「……あぁ…そうさ。俺は無個性さ。何も持っちゃいない…。」
ＡＦＯ
「ならなぜ…」
君島
「だけどよぉ！…俺は……あいつと出会っちまった……あぁ…出会っちまった。……だったら……やるしかねぇだろ‼？」
片腕で銃を構え、邪悪そのものであるＡＦＯを向ける
君島
「……それにな、こんなちんけな俺にも、……すぐにあきらめちあう俺にも……くすぶってるもんが…あるのさ！」
ＡＦＯ

「……なんだね？それは。」
君島
「意地が……あんだろ…！男の子には‼？」
ＡＦＯ
「…くだらない。」
銃の発砲音と何かを殴りつける鈍い音と轟音が響き、燃え盛る街に響きわたる。
……その後、オールマイトが到着しあの激戦になった。

「次のニュースです。昨夜２０時頃にオール・フォー・ワンによるテロが発生しました。その事故による被害は甚大でしたが、オールマイトの活躍により、死傷者はほぼ０でしたが……今回のテロで出た被害者はオール・フォー・ワンに立ち向かったオールマイトと同じく立ち向かったと思われる拳輝和真（１０）ーーーーーー以上の十数名でした。…続いて、今回のテロで出た死傷者は……君島邦彦（１９）……以上の１名でした。

第０話　オリジン～中編～

和真
「……こ…こは……」
ーーー目が覚める。あたりを見ると白いベッドが並んでいる。
和真
「……病…院…？……なん…で……ここ…に？」
ーーー何故自分がここにいるかを思い出す。
和真
「……そうか……あの時…。」

７／２８（金）
ＰＭ８：３０。
和真
「ハァッ…！ハァッ…！ハァッ…！」
ーーー少年は走る。たくさんの悲鳴や思いを振り切り、走り続ける。…のだが、
和真
「……やっぱり…だめだ！置いていけない‼？」
ーーー立ち止まったのち、少年は戻ってしまった。悪の権化がいる地獄へと。
ーーー戻ってきた頃には君島は傷とあざだらけになり倒れていて
和真
「君島さん！君島さん‼？」
君島の体をゆすり
ＡＦＯ
「ーーーやぁ、戻ってくるとわかっていたよ。和真君。」
和真
「…あんたは……‼？」
ＡＦＯ

「そんな睨むなよ。息子よ。」
和真
「……っ誰が‼?あんたの息子だよ‼?」
ＡＦＯに殴りかかるが、あっさり避けられ
ＡＦＯ
「おいおい、そんな警戒するなよ?さぁ、一緒に家に帰ろうぜ?」
和真
「黙れ‼?」
拳が当たる……が、個性がまだ発現していないからか、ただの弱い子供の拳として、片手で受け止められ
和真
「な……⁉?」
ＡＦＯ
「全然、痛くないよ。ほら、捕まえた。」
ＡＦＯが和真を自分の子供のように抱き上げ
和真
「くそっ…離せよ!このっ!」
ＡＦＯ
「断るよ。」
眠らせる個性を和真に使用し、
和真
「っ…何を…し……た…‼?」
ＡＦＯ
「眠らせる個性を少し…さ。」
和真
「ふざける……な…‼?」
徐々に睡魔が襲って来て
和真
「……くそ……ねむ…け……が……。」
ＡＦＯ
「さて……連れて行くか……ん?」

君島
「ま……て……！」
ＡＦＯ
「……まだ生きていたのかい？」
逃がさんとばかりに足を掴んでいる君島がいて
和真
「きみ……し……ま……。」
君島
「言ったろ……意地が…ある……って…。」
ＡＦＯ
「くだらない意地だと言ったろ？」
君島を衝撃波で吹き飛ばし、和真を地面に置き
ＡＦＯ
「……鬱陶しい。いい加減、諦めたらどうだい？」
横たわる和真の前で、容赦なく殴り続け
和真
「……（ち…く…しょう……動け…動けよ、動け！）」
遠のく意識の中、必死に体を動かそうとする
和真
「（…このまま…見殺しなんて…ごめんだ！…あの人を……助けなきゃ…いけないんだ！……だから……動けよっ！俺の…体ぁぁぁぁアアアアアアア‼？）」
必死に立ち上がろうとする。鉛のように重い体を起こし立ち上がる。
ドスッ
ーーーだが、次の瞬間。鈍く、突き刺さる音が響いた。
和真
「……え？」
ものすごく嫌な予感を感じながら、なんの音かを確認するために前を見上げる。……その予感が、外れることを祈りつつ
和真

「……っ！」
……君島は…腹部を貫かれていた。
それも…深く風穴が開くほどに。それでもって……的確に命を刈り取るように。
和真
「君島さん！」
名前を呼ぶが、帰ってくるのは、ただ、家族に等しい、大切な人が”死んだ”という事実だけで
和真
「……あ…あぁ……あぁぁぁぁぁァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ‼？」
少年は泣き叫んだ。助けられなかった後悔と自責心を孕みながら、どうしようも無い現実に対し、ただ……なきさけんだ
その時、少年の右腕が突如として輝き始め、周囲の地形を粒子にしながら手の甲に吸い寄せられる。
和真
「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ‼？」
ＡＦＯ
「なっ…⁉？」
拳から光の衝撃波を出し、ＡＦＯの腹部にあたる。その後、少年は気を失い倒れた。一方、ＡＦＯはと言うと、血反吐を吐きながら、腹部を軽く抑えていて
ＡＦＯ
「…ふ…フフフッ……ハハハハハ……なるほど…いい個性だね…！いつもなら、僕の物するが、少し力を預かるだけにしておくよ……。なんせ、」
ーーーそっちの方が面白くなりそうだからね…。
そうして、ＡＦＯは少年の個性を全てではないが、預かっていった……。

和真

「そうだ…それで…俺は…俺…は……！」

自分の右手を見る。……何も守れなかった、非力な自分の右腕を。

第０話　オリジン～後編～

暫くして、少年は退院した……が、
ーーー退院後、少年は心を閉ざしてしまった。
通っていた小学校は君島が死んでしまったショックで不登校になってしまい、ずっと部屋に閉じこもっていた。

和真
「……俺が…あの時…立っていれば……君島さんは……君島さん…は……！」

部屋に引きこもっては自責の念に駆られ、自分を責め続けた。

……そんなある日、和真が昼飯を買いに行っていた時のこと

???
「よう、久しぶりだな！カズヤ！」

和真
「……カズマです…。…こちらこそ、久しぶりです。空我さん。」

空我（くうが）
「おいおい、随分と元気がねぇじゃねぇかぁ？カズヤ」

和真
「カズマです！…いきなりなんです？空我さ「お前、学校行ってないんだってなぁ。」

食い気味で空我が言う

和真
「……あなたには関係ないでしょ……。」

空我
「……そうかよ。」

和真
「…じゃあ、俺はこの辺で（ガシッ）……なんですか。」

空我
「……ちょっと、散歩に付き合え。」

和真

「ちょ、空我さん⁉?」
空我が和真の腕を掴んだと思いきや、和真をどこかへ連れて行ってしまった

雄英のとある所にて

和真
「ここって…」
空我
「…あぁ、雄英高校のグラウンドβだ」
空我が連れてきた場所はなんとあの雄英高校のグラウンドβだった
和真
「な…なんで…雄英に…⁉?」
空我
「先生には許可をとっているんだ。……さぁ、見せろよ、個性を」
和真
「っ!」
空我
「発現したんだろ?だったら使ってみろよ。」
和真
「……嫌だ…　。」
空我
「……そうかい…でもな、使わなくて…いいのか?こっちは、やる気満々だってのによ。」
そう言うと、空我の周囲の地形の所々が抉れるように無くなり粒子化し空我の足に纏わり、別の物質に再構築され、空我の足が機械的な足になる。
空我
「……ラディカルグッドスピード!脚部限定ッ‼?」
和真に向かって加速し、途中で小さく跳躍し、

和真
「なっ⁉?」
空我
「ヒールアンドトゥウウウウッ⁉?」
……蹴った。
和真
「ちょっまっ…⁉?」
とっさに個性を使用し、空我と同じように周囲の地形を分解し、粒子化し右腕に纏わせ再構築する。和真の方は腕が金と赤を基調とした腕になり右肩の後ろには赤い羽らしき物が3枚浮かんでいた。
和真
「ぐっ……⁉?」
ドゴオオオオオオオンッ⁉?
変化した腕で防御に成功したものの、衝撃に耐えれず、少年は吹き飛ばされ、背後にあった建物に轟音と共にぶつかる。
和真
「……。」
空我
「……強く蹴りすぎちまったか?」
和真を吹き飛ばした張本人、空我が焦っていたその時、和真が静かに、ゆっくりと立ち上がる。
空我
「(良かった…無事だった……)……いやぁ、すまんすまん!ちょいと強く蹴りすぎちまった!」
和真
「……。」
空我
「(……ん?)…黙っちまって、一体どうしたんだよ?カズヤ?」
和真
「……。」
空我

「(……あれ？)」
いつもなら名前を間違えた場合、即座に反応するはずなのに、全く反応しない和真に違和感を覚えながら近づき
空我
「おいおい、いくらなんでも無視はないだろ？カズ……‼？」
和真から膨大な殺気を感じ、即座に距離を取るが、回避が少し遅れたせいか、和真の攻撃が空我の頬をかすった。
空我
「……。(かすったか)」
和真
「……グルルルル……」
空我
「……どうしちまったんだ？和真…！」
和真が、まるで獣のようになってしまったことに驚きを隠せずにいて
和真
「……グルアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ‼？」
咆哮を上げ突撃し、空我に右の拳を振るう。
空我
「……(動きは単調…だが、喰らったらひとたまりも無いな……なら！)」
ガッ！ゴッ！ドゴッ‼？
和真の拳を避けながら冷静に分析した後、素早い蹴りで拳を弾き、
空我
「このな単調な攻撃じゃあ俺は倒せねぇぞ？和真‼？」
和真
「グゥウウウウウウウウウウウウウウ‼？」
和真が唸った途端、右肩の後ろの羽の一枚が崩れ始め、さらにそこから空気が噴射され、一気に距離を詰めた後、勢い任せに真っ直ぐに拳を振るってきた
和真

「ガァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァアッツ‼？」

空我

「なに⁉？」

予測していなかった攻撃に少々驚いたが

空我

「だが……甘い！」

ガキィイイイン‼？

和真のの拳を力を込めて上に弾き、体制を崩す。そして上に高く跳躍し

空我

「衝ォォォ撃のォォォォォォォォォ‼？」

飛び蹴りの型を作り

空我

「ファァァァァァァストブリットォォォォォォォォォォォォ‼？」

和真に目掛けて飛び蹴りを放つ。和真自身は後ろの羽を崩し、二度目の加速によって威力が上がった拳を放つ。お互いの攻撃が衝突し合い辺りには衝撃が走る。……が、

ビキッ‼？

和真

「ガッ⁉？」

和真の右腕にひびが入り、

ベキキッ…バキッ…‼？

ひびがが広がり始め、

和真

「ガッ…グルルルッ‼？……グッ……グガァァァァァァァァァァァァァァ‼？‼？」

ベキベキッ‼？バッキーン‼？

和真がまた後ろに吹き飛ばされ、右腕は完全に崩れ元の右腕に戻る。それと同時に右腕が変化する際に抉れるように粒子化し消えた

物質が元の場所に戻り、和真は気絶してしまった。
和真が目覚めたのは、そこから約一時間後だった。
和真
「……こ…こは…？」
空我
「おはようカズヤ！」
和真
「……カズマ…です。」
空我
「あぁ、すまん。」
和真
「…俺…暴走しました？」
空我
「…まぁな。」
和真
「……すいません…コントロール出来なくて…。」
空我
「…気にすんな。」
和真
「……俺…怖いんです…自分の個性が…壊すだけしか力がない個性が……！」
空我
「……和真。よく聞け」
和真
「……なんですか？」
空我
「……お前の個性は強力だ。それにすぐ暴走する。」
和真
「……はｉ「だがなぁ！」」
空我
「…お前はそれを理由にして逃げているだけなんじゃねぇのか？」

和真
「っ！」
空我
「個性っつーのは、簡単に言っちまえば自分自身だ。それに向き合わねえって事は、逃げてるって事と同じなのさ。」
和真
「……でも「でもじゃねぇ！」」
空我
「確かに個性は怖いさ。他人を傷つける可能性だってある。だけどなぁ、その力と向き合って、その力で人守んのがヒーローなんじゃあねぇのか？」
和真
「……それ…は…そうだけど…」
空我
「…今のお前を君島が見たら、おちおち寝てらんねぇんじゃねえのか？」
和真
「……」
空我
「…いいか？和真。人には、そいつが決めた道がある。俺もそうであるように、お前もそうなんだよ。」
和真
「……俺の…道…」
空我
「そうだ。自分の道は自分で決めろ。…俺は俺の道を最速で駆け抜ける。だから……」
ーーー迷うんじゃねぇぞ？和真。
和真
「っ～～～！…あぁっ！俺はもう迷わない！」
空我
「その意気だカズヤ！」

和真
「カズマです！…それと、空我さんに頼みがあるんですが…」
空我
「…おう。なんだって言え。」
和真
「…俺、雄英に入ろうと思います。だからっ！…卒業するまでで良いので、俺が個性をコントロールできるように手伝ってください‼？」
空我
「…卒業までぇ？なに言ってやがる！お前が中学卒業まで鍛えてやるよ‼？」
こうして少年と青年の秘密の特訓が始まった……
そして、約６年の月日が流れ、
空我
「…さて、明日でお前は中学卒業か…短いもんだったな…。…まぁ最速で駆けたんだし当たり前か‼？（）……まぁ、なんだ、これで基礎的な事は全部教えた。あとは自分で鍛えろ。」
和真
「……空我さん…‼？……お世話になりました‼？
頭を下げて
空我
「おいおい、やめろよ。お前らしくねぇ。……まぁ、悪い気分じゃあねぇな。」
少し照れながら拳を出し
和真
「空我さん？」
空我
「……頑張れよ！和真！そんでもって、俺に追いついてみろ‼？」
和真
「…追いつくどころか、追い越します‼？」
拳をぶつけ合い
空我

「言うじゃねえか！……楽しみにしてっぞ‼？」

和真

「はい‼？」

こうして、彼は向かう。様々な気持ちを抱えながら、ヒーローを目指すために！

第1話　始まり

ーーーいつも同じ…夢を見る。
ーーー周りが火の海で、助けを乞う声が聞こえる。
ーーー…目の前で、家族に等しい人が……殺されかけている……。
ーーー……手を伸ばしてみるものの、体が縛られた様に動かない。
ーーー……そして…また、その人を…守れなかった……。
ジリリリリリリリリッ‼?
???
「……ん……ぅーーん……。」
ジリリリリリリリリッ‼?
???
「……ぅーーん……。」
ジリリリリリリリリッ‼?
ガチンッ‼?
???
「い,,…‼?」
……目覚まし時計に熱烈なキス（物理）をされる。
???
「……また、あの日の夢…か。……てか、今何時だ?」
時計を確認する。時刻は……。
???
「……8：10……。」
…あれ?…ところで……今日って確か……
???
「…雄英試験の日…。」
……雄英試験開始時間は?
???
「……8：30…。」
……現時刻は?
???

「……8…10…過ぎたな……。」

……準備は？

???

「……一切……して…ない…なぁ？」

……あれ？……これ……やばくね？

???

「……スゥ～～～～～……」

……。

???

「……やばいッッッ‼？‼？」

試験当日だってのに寝坊して急いで支度やらなんやらしているこの男、名は拳輝和真（けんきかずま）。今年で15になった雄英受験生で、皆を助けるヒーローを目指す主人公だ。

世界総人口の約8割が何らかの超常能力、〝個性〟を持ち、その〝個性〟によって社会を守る〝ヒーロー〟という存在が確立された世界。

だが、極稀に、突然変異を起こし、血筋とはまるで違った個性を持ち生まれる者もいる。

この物語は、そんな極稀な例外を抱えながらも、皆を守れるヒーローを目指すと志したある青年の物がた「遅刻するゥゥゥゥゥゥゥ‼？」

……物語である‼？

和真

「ママチャリは……あ！パンクしてる‼？……走れぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ‼？‼？」

???

「そんなに慌ててどうした？カズヤ。」

黒い車から声が聞こえ

和真

「カズマです！ってその声は…空我（くうが）さん‼？」

空我
「まさか寝坊か?カズヤ」
和真
「だから、カズマです‼?」
空我
「いやぁ、すまんすまん!」
黒い車に乗っている男、頂速空我（ちょうそくくうが）が苦笑いしながら謝ると、突然止まり
和真
「……空我さん?」
空我
「…乗ってけ。このままじゃあ遅刻すんだろ?」
和真
「!…ありがとうございます‼?」
和真がそう答えた途端、上の方向にドアが開き、和真が中に乗り、
空我
「シートベルトしとけよ?」
言われた通りにシートベルトを閉めるといきなり速いスピードで走り出し
和真
「ちょ…いきなr「さあアア!行くぞぉ‼?」
空我が今運転している車の外装が突然粒子化し、別の車に変わると、さっきとは段違いな速さで走り出し
和真
「い き な り は や ぁ ぁ ぁ ぁ ぁ ぁ め ぇ ぇ ぇ ぇ ぇ ぇ ぇ ぇ てぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ‼?‼?」
和真の願いも虚しく散り、トップスピードで雄英試験会場へ向かうのだった。

～雄英試験会場～

……ウウウ……
受験生1
「……ん？なんの音だ？」
……ウウウウウン……
受験生1
「……車？……ってん？なんか…見えるな？」
…ブウウウウウウウウウウウウウン!!？!!？
受験生1
「……なんだあの車!?？」
…ブウウウウウウウウウウウウウン!!？!!？
受験生1
「やばいっ！ぶつかる!?？」
キキィィィィィィィィィッ!!？
受験生の前で横向きになるようにドリフトしながら停止し、中から人が出てきて

和真
「し…死ぬかと思った……。」
空我
「着いたぞ？カズヤ。」
和真
「カズマ…で…す…。」
空我
「体調でも悪かったのか？カズヤ。」
和真
「カズマです!!？大体、あんたのｓ……やばい！５分前だぁ!!？行ってきます!!？」
空我
「行ってこい！和真!!？」
和真
「…はい！行ってきます!!？」

試験会場へ急いで走り出し、その場を去る和真を見て…
空我
「……頑張れよ。和真！」
…こっそり応援する空我だった。

…ちなみにこの後警官にすごく怒られたのは言うまでも無い。

和真
「ここが…試験会場……！」
会場に入った後、指定された座席に座り、周りを見る。すると、右隣で少しブツブツうるさい子がいて
和真
「…ねぇ。そこの君。」
緑髪の子
「⁉？…な…　なに？」
和真
「…緊張してるのか？」
緑髪の子
「！……うん、少し…ね。…君は？」
和真
「…俺も少し…かな。…ねぇ君、なま『今日は俺のライヴにようこそー!!!　エヴィバディセイヘイ!!!!』」
会場の真ん中を見るとそこには、グラサンをかけ、パンク風の服を着ていて、金髪が逆立っている男がいて
???
『こいつぁシヴィーーー!!　受験生のリスナー！　実技試験の概要をサクッとプレゼンするぜ!!　Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ⁉』
???
『ＹＥＡＨＨ!!!』
和真
「……い…イェー……？」

和真だけノった（？）形になり、その後何事も無かったかのように説明が始まった。
ちなみにその時、周りは
受験生たち
『（の……ノるんだ？）』
……と一斉に思ったそうだ。
緑髪の子
「ほ…本物だ……。」
……1人を除いて
その後もプレゼント・マイク（以降はマイクと呼ぶ）の説明は続き
マイク
『入試要項通り！　リスナーにはこの後！　１０分間の「模擬市街地演習」行っを行ってもらうぜ！　持ち込みは自由！　プレゼン後は各自指定の演習会場へ向かってくれよな!!　Ｏ・Ｋ・!?』
白髪の子
「ダチ同士で協力できねぇのかよ…」
緑髪の子
「ほんとだ…違う。」
白髪の子
「見んな殺すぞ。……テメェを潰せねぇじゃねぇか…」
なんか物騒なことが聞こえた気がするがまぁ後回しにしておいて説明を聞く
マイク
『演習場には〝仮想敵かそうヴィラン〟を三種多数配置してあり、それぞれの「攻略難易度」に応じてポイントを設けてある!!　各々なりの〝個性〟で〝仮想敵かそうヴィラン〟を行動不能にし、ポイントを稼ぐのが君達リスナーの目的だ!!　もちろん他人への攻撃等アンチヒーローな行為はご法度だぜ!?』
???
「質問よろしいでしょうか!?」
前の席に座っている眼鏡をかけた子が手を挙げ

眼鏡
「プリントには四種の敵ヴィランが記載されております！　誤載であれば日本最高峰たる雄英に置いて恥ずべき痴態!!　我々受験者は規範となるヒーローのご指導を求めてこの場に座しているのです!!」
真面目だなぁと思いつつ聞いているとこちらの向き右隣の子に指を刺し
眼鏡
「ついでそこの縮毛の君！先ほどからボソボソと…気が散る！」
そう言って緑髪の子を睨みつけ
眼鏡
「物見遊山のつもりなら即刻、此処から去りたまえ‼？」
緑髪の子
「…すみません。」
緑髪の子が口を押さえながら謝ると同時に会場から少し笑い声が聞こえる
……まぁ正直言うとうるさいが、……なんかうざいな…あの眼鏡……。
ジトーっと眼鏡を見ていると
眼鏡
「そこの君、何か言いたいことがあるか？」
和真
「……別にないよ。」
そう言って眼鏡を見るのをやめる
マイク
『ＯＫ、ＯＫ。受験番号７１１１君。ナイスなお便りサンキューだ。』
そう言うと、マイクは説明を続け
マイク
『説明しちまうと、この四体目は、
――０Ｐのお邪魔虫だ。』
なんでも、四つめの敵は、巨大で好き勝手暴れている為、普通なら倒せない敵で、万が一倒せたとしても、０ｐなので倒す意味がない。

だから、遭遇した場合は逃げるのがおすすめ……らしい。
和真
「……。（まぁ、実際の現場じゃあ、アクシデントは付き物…だからな）」
眼鏡
「ありがとうございます！失礼しました‼？」
マイクの説明が終わると、眼鏡はそう言って頭を下げ、席に座る。
マイク
『俺からは以上だ！最後にリスナーへ我が校の〝校訓〟をプレゼントしよう！――かの英雄〝ナポレオン・ボナパルト〟は言った！〝真の英雄とは人生の不幸を乗り越えて行く者〟だと！』
『さらに向こうへ！　‼？――それでは皆……』
――良い受難を…。
そうして、俺達の入学試験が始まった…！

第2話　試験

マイクの説明が終わり、和真と緑髪の子は別れ、各々の会場へ向かった……。

和真

「……ここが演習会場Cか…。」

そこは、一つの都市を模したような会場で、そこへ入るための巨大な門の前に自分を含めた受験生が多数いる。

和真

「……スーーー……ハーーー……。」

深呼吸をし精神統一をする。すると、ブツッと言う音が微かに聞こえ、

和真

「……使っとくか…。」

そう小さくつぶやくと右腕を前に突き出し、人差し指から中指、薬指、小指、最後に親指の順で指を閉じ、握り拳を作り、個性を使う。すると髪が逆立ち、右腕が手の甲から肩と上腕の付け根まで三枚おろしの形で分かれ、金の糸みたいな物がその腕を合わせるように巻きつく。それと同時に、周囲の地面が抉れるように消え粒子化し、右腕に集中し、装甲となり右腕に生成され、右肩の後ろには赤い羽みたいな物が3枚浮かぶように生成される。それで全工程が完了し、右手が赤く、金とオレンジを基調とした腕になる。

和真

「……。」

拳を構え、黙って備える。周りにいる人達は「何やってんだ?」と少しざわめくが、数秒後に

マイク

『ハイ!――スタァァァァァトッ!!!』

和真

「せいっ!」

合図が聞こえたと同時に拳で地面を斜め後ろの角度で殴り、その衝

撃で前へ飛ぶ。
前方から装甲に2と書かれた四足歩行の仮想敵が現れ、
和真
「邪魔だァァァァァァァァァ!!?」
向かってきた前方の仮想敵の頭部に拳を当て、仮想敵は拳の衝撃により頭部が吹き飛び、再起不能になる。
ーーー和真以外の受験生達が動き出したのはそこから数分後であった。

残り時間が5分になる頃には５０ｐ以上は取っていた。
和真
「……ふぅ…こんなもんか。」
空を見上げて
和真
「……あいつ…上手くやってっかな……。」
ふと、緑髪の子の事を思い出し、空を見上げている。
すると、突然轟音が鳴り
和真
「…!?なんだ!?」
受験生Ａ
「やばい！０ｐの仮装敵だぁぁぁぁぁぁ!!?」
受験生Ｂ
「に、逃げろぉぉぉぉぉぉぉぉ!!?」
逃げてくる受験生の後ろから巨大な仮想敵が現れ
和真
「あ……あれが…０ｐの……仮想敵……!?」
逃げた方がいいと言われたのに納得がいくほどの大きさの仮想敵を前にして逃げようとするが（だって倒しても意味ないし）その時、
和真
「……逃げ遅れ!?」

巨大仮想敵の進行方向には、逃げ遅れた受験生達を守るために戦おうと、(個性なのか)巨大な拳を構えている女子がいて、よく見るとその手が震えていた。

和真

「ーーーー。」

……不意にも、その姿が、今はいないあの人の姿と重なって見えていた…。

???

「今のうちに逃げて!早く!!?」

大きくした自分の拳を巨大な仮想敵に向けて構え、後ろにいる受験生2人に呼びかける。

…しかし、呼びかけられた2人は恐怖で腰を抜かして、逃げれずにいた。

???

(まずい…早く、何とかしないと……!)

そう考えていると、目の前の巨大仮想敵がその子目掛けてアームを振り下ろす。

???

「しまっ……」

当たった…と思い、目を瞑ったその時

ドゴォォオン!!?

目の前で轟音が響いた。何が起きたか分からなかった為、目を開けるとそこには…

???

「……な…何が……!??」

目を疑うような光景があった。

目の前には、自分と同い年くらいの男子が巨大な仮想敵のアームを赤と金を基調とした右腕の拳で…たったそれだけで受け止めていた…それどころか、逆に巨大仮想敵のアームがへこんでいた。

ーーー自分でも分からなかった。
ーーーなんで動いたか…。なんでその子を助けようとしたのか…。
ーーー考えても分からなかった…。
ーーー…でも、一つだけたった一つだけ、確かなことがあった。
ーーー……ここで彼女を助けなきゃ、自分はいつか必ず後悔する。
ーーー…ただ、それだけだった。

和真
「……無事かい？」

???
「えっ……あっ…うん。」

和真
「そうかい。…　…あんた、名前は？」

拳藤
「私は…拳藤一佳。あんたは？」

和真
「…拳輝和真。拳輝くって書いての拳輝だ。…よろしく。」

一佳
「…こっちこそ。…さっきは、ガガガガガッ‼？
巨大仮想敵がもう一方のアームで攻撃しようとしていた。

和真
「やっぱり簡単には無理か…！…あんた！巻き込まれたくなかったら下がってな！」

一佳
「でも…！」

和真
「いいからとっとと行け‼？俺は大丈夫だからよ‼？」

一佳
「…わかった！…必ず、雄英で会おうね‼？」

和真

「あったりめーだ‼?」
和真がそう言うと、一佳が後ろを向いて走り出した。
和真
「さぁて、こっちも始めるかね…喧嘩をよぉ‼?」
そう言って和真は地面を右腕の拳で殴りつけ、天高く跳躍する。
和真
「衝撃のファーストブリット……‼?」
前腕の装甲が横に展開し、後ろの一番下の赤い羽が崩れる。するとそこから風が噴射され、真っ直ぐ巨大仮想敵に向かって降下する。そしてある程度近づいた後、体を一回転し、そのまま流れるように拳を相手に放つ。
和真
「うおぉぉりやぁぁぁぁぁぁぁ‼?」
ドゴォォオン
巨大仮想敵の頭部のど真ん中に当たり、そこから徐々にヒビが入り砕け、派手な轟音を響かせ、崩れながら倒れる。
一佳
「…す……すごい……。」
そして
マイク
『終了ぉぉぉぉぉぉ!!!』
……轟音が鳴り響いた直後に響く、試験終了の合図。

一方その頃、審査員達は、試験の様子を巨大なモニターで見ていた。
マイク
「おいおいおい‼?今年は本当に優秀な奴が多いな!」
???
「そうですね…。０ｐの仮想敵をたった1人で、しかも2人もいる…今年はすごい子ばかりだ。」
宇宙服みたいなコスチュームを来た審査員がそう言いうと、０ｐの

仮想敵を吹き飛ばしている２人の受験生がいる会場の映像が映し出される。
一つは演習会場Ｂの映像、もう一つは演習会場Ｃの映像が映っている
???
「にしても……」
ガンマンみたいなコスチュームを来た審査員が呟き
Ｂの方の映像を見て
???
「……まさか敵Ｐが０……救助活動Ｐだけで合格とはな」
そう、あらかじめ受験生には知らされていない採点項目がある
それが救助活動Ｐ。
救助活動をすることで加算される隠し得点（ちなみに加算するかはどうかは審査員が判断する）
緑髪の子は敵Ｐは０だったが、同じ受験生の女の子を助けるために０Ｐの巨大仮想敵を吹き飛ばしたことにより、救助活動Ｐ、６０Ｐを獲得できた為、合格出来ていた
???
「最初こそは不合格者の動きだったけど、最後のはグッと来たわねぇ……。」
マイク
「俺もさ‼?心の中で何度も叫んじまったぜ‼?」
結構ギリギリなコスチュームを来た女性審査員とマイクがテンションを上げながら言い
???
「ソウダナ。」
コートを来た黒い骸骨みたいな審査員が同意し
???
「…タダ……。」
Ｃの方の映像を見て
???

「…彼モ彼デ、ナカナカスゴイ。」
Ｃの映像では和真が巨大仮想敵のアームを右腕の拳だけで受け止め、さらには拳で巨大仮想敵を頭部から砕いていて
マイク
「こいつを見た時、俺は度肝を抜かれたぜ‼?·まさか、０ｐの巨大仮想敵の攻撃を防いで、拳で砕いちまうとはな…」
???
「すごい個性……でも…なんか、違和感があるのよねぇ…」
???
「…違和感?」
ボサボサな髪の審査員が反応し
???
「えぇ、……あの子、個性を使ってからか筆記の時とはまるで別人だったのよ。」
???
「…ソウ言ウ個性ジャナイノカ……?」
???
「まぁでも、結果で言えば彼は文句なしの合格だ。」
すると、真ん中に座っている白いネズミみたいな審査員に注目が集まり
???
「此処からは彼らを僕たちが正しい方向へ育ててあげようじゃないか。」
そう言った後、他の審査員達も同意し解散していった。
ーーーそして合格結果が届いたのはそこから3週間も後だった。

第3話　入学

ーーー試験から3日たったある日。
ピンポーン
和真
「はーい！」
扉を開け
和真
「何方さんですｋ……？何これ？」
何かが入っている手紙みたいなものが渡され、その手紙は雄英と書かれた蝋で封されていて
和真
「……合格発表か‼？」
早速自室に入り中身を開ける…が、中には黒くて丸いものと紙が2枚入っていて
和真
「……？」
一人困惑して、黒い物体を触っていると、カチッと音がし真ん中から
オールマイト（ホログラム）
『わぁたぁしぃがぁぁぁ…投影された‼？』
和真
「うおぁ⁉？……って何だホログラムかよ……びっくりした…。」
ホログラムのオールマイトが飛び出し、喋りだす
オールマイト（ホログラム）
『ＨＡＨＡＨＡＨＡ！――最初に言っておくけど、この為だけの特別出演とかじゃないよ‼？「何も言ってｎ」実は私は今度から雄英の教師として勤めることになってね！　まぁそういうそういう事なんだ‼？』
和真
「……は？教師？」

オールマイト（ホログラム）
『さて！　ではこっからは諸事情で巻きで行くよ！拳輝和真君！　敵Ｐ６０！　これだけでも合格ラインだ！…だが、試験官達が見ていたのはそれだけであらず!!――どんな状況でも助けてこそのヒーローさ!!　偽善上等！　我々が見ていたもう一つのＰこそ救助活動Ｐだ!!君の救助活動Ｐは４０Ｐ！――合計１００Ｐ――入試１位！　文句無しの合格さ!!』
和真
「…いよっしゃぁぁぁぁぁぁぁぁ‼?」
和真が嬉しさのあまり雄叫びを上げた
…その後、隣人に怒られたのは言うまでもない。
合格発表の翌日　朝
とある墓の前にて
青年は墓の花を取り替え
和真
「…なぁ、君島さん。僕、合格したよ。」
墓の前で屈み、線香を焚きながら
和真
「…僕、ヒーロー目指して頑張ってみるよ。君島さんの時みたいに目の前の人を助けれる様に頑張るから！……だから…」
目からは涙を流し、それでも笑顔でいて
和真
「……だから、そこで見てくれ。僕…いや、俺が…皆を守る…ヒーローになる所をさ……！」
そう言って立ち上がり、帰ろうとする。…が
君島
『頑張れよ?･和真！』
和真
「ーーーえ?･」
慌てて振り変える。…そこには何もいなかった。
和真

「今の…声…は…。」
そしてすぐ反対を向き
和真
「ーーあぁ、頑張るよ。君島。」
そう言って去っていった。
ーーー後ろから彼が見守っているのをさとりながら
そして、巡り巡ってきた入学初日
和真
「…さぁて、行くか！」
雄英の制服を着て、道具が入った鞄やら何やらを持ちアパートの部屋からドアを開け出る。
校門前にて
和真
「…ここが…かの有名な雄英高校か…。」
桜が散らばっている道を歩きながら、期待と春の空気を胸いっぱいに吸い込み、雄英高校の校舎を見上げる。それはビルみたいな感じの建物で、真ん中には英語で『ＵＡ』と黄金に輝いていている文字がつけられている。
和真
「…派手だなぁ……。」
と眺めていると、
???
「お…おはよう…」
と後ろから聞き覚えのあるような…ないような声で言われ
和真
「？誰でｓ…何だ貴方か。」
振り向くとそこには会場であった女の子がいて
和真
「貴方は…確か……え～～っと……。」
一佳
「…一佳。拳藤一佳よ。…もしかして、忘れちゃってた？」

名前を聞いて、試験の時を思い出す。
和真
「あっ…あぁ～。…ごめん。名前覚えるの苦手で…。」
一佳
「いいよ！気にしないで！今から覚えればいいんだしさ、ね？」
和真
「……それもそうか…じゃあ、これからよろしく！一佳さん！」
一佳
「こちらこそ、よろしく！和真！」
二人で握手をしお互いの名前を覚えた。
その後二人は教室を目指して歩く
一佳
「へぇ～…和真はA組なんだ！」
和真
「そう言う一佳さんはB組なんだね…。」
そう、他愛もない話をしていると、ふと、一佳が気が付いたように話を切り替え
一佳
「…ところで…和真ってさ、…試験の時となんか…違くない？」
和真
「…？何が？」
一佳
「いや、そのさ…性格というか…」
和真
「…それは……。」
話したくないのか、黙り込んでしまい、
一佳
「あーー…あっほら！あったよ！」
話したくないことを察したのか、気まずくなってしまうが、その時偶然にもクラスについたため、なんとか話を切り替えれた。
その後、お互いの教室の扉の前へ行き

一佳
「またね！和真！」
和真
「うん！またね！一佳さん‼？」
そうして分かれ、和真は一年Ａ組の扉を開けた。これから始まる高校生活に胸を躍らせて‼？
ガラッ！
眼鏡
「机に足を掛けるな!!　歴代の先輩方や机の製作者に申し訳ないと思わないのか!!」
白髪の子
「思う訳ねぇだろうが！　どこ中だこの脇役が!!」
ガララララ……ピシャン
……即閉めた。
…見間違いかな？なんか、明らかにヴィランっぽい奴がいたけど？
そう思いもう一度扉を開けると、
和真
「……。」
白髪の子
「……。」
……目が合った…。
……ガララララ…ガシッ「おい」
白髪の子
「閉めんなや」
和真
「…あっハイ。…すいません……。…ってん？よく見たら貴方…あの時…緑髪の子の隣にいた……」
白髪の子
「…あぁ？誰だ？テメェ…？」
和真
「て事は…やっぱり！」

白髪の子を退け、ある人を探す…のだが、
緑髪の子
「だめだよ…かっちゃん……って君は！」
…向こうから来てくれた。
和真
「…やっぱり合格してたんだな！君!!？」
緑髪の子
「…うん！合格出来た！」
和真
「良かったじゃん！…え～～っと……。」
緑谷
「あぁ、僕の名前言ってなかったね…僕の名前は緑谷出久。これからよろしく！」
和真
「俺は拳輝和真だ。よろしく!!？」
緑谷
「よろしくね！和真君！で…そこに居るのが…」
爆豪
「勝手に人の名前言うんじゃねぇ!!？クソナード!!？」
緑谷
「ひっ！ごめん…」
爆豪
「…爆豪勝己、それが俺の名前だ。」
一見ヴィランっぽい見た目の青年、爆豪勝己が睨みながらも言い
和真
「そっか…よろしく。爆豪。」
早速呼び捨てにしてみる…が何が気に食わなかったのか
爆豪
「呼び捨てにすんじゃねぇ！」
和真
「!?ご…ごめん…。」

怒られてしまった…。
そうして騒いでいると、教卓の方から声が聞こえ
???
「お友達ごっこがしたいなら他所へ行け。……ここはヒーロー科だぞ？」
教卓に（よく見るとあった）寝袋が起き上がり顔を出した。
和馬は混乱しながらも一番後ろの窓際の席に座り
???
「はい、静かになるのに9秒かかりました。時間は有限。君達は〝合理性〟に欠くね。」
黒いボサボサな髪型で少し怖い顔をしている寝袋男は寝袋から出て、教卓に立ち、呆れたかのように言い放った。
相澤
「俺は担任の〝相澤　消太〟だ……よろしくね。……そして〝これ〟着てグラウンドに出ろ」
これ…と言われて出されたのは雄英の人数分のジャージだった。そしてそれをクラスのみんなに配り始める。
いきなりジャージを渡された和真たちは困惑し、ざわめいた。
眼鏡
「担任⁉？し、質問宜しいでしょうか！」
相澤
「却下。」
即答で否定された後、相澤先生が先にグランドに向かったので、和真達は困惑しながらも更衣室で着替えグランドに向かったのであった。
ちなみに着替え中にクラスの男子の名前を知った。

グランドにて

一斉

『『個性把握テストオオオオオオオオ⁉？』』

麗日

「え⁉？入学式は⁉？ガイダンスは‼？☒」

相澤

「そんな悠長な事、ヒーローになったら出来る時間なんてないよ。それに、雄英（うち）は自由な校風が売り文句。先生側もまた然り。」

同じクラスでどこかこう…丸っこい（失礼）女子、麗日お茶子の意見をあっさりと一蹴した後、相澤が説明を続けた。

……自由な校風が売り文句…確かに兄貴から聞いてはいたが……いくらなんでも…

和真

「…自由すぎるでしょ…。」

こうして、個性把握テストが始まったのだった